



【イエスキリストの御名によって】

聖書本文：使徒の働き 3章 1－10節・暗唱聖句：使徒の働き 3章 6節

説教者：鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！先週一週間もお元気でしたか。段々寒くなり、年末で仕事も忙しくなっていますが、みなさんの信仰と心、体全てが守られ、恵まれ、今年も主に感謝を持って有終の実を飾ることができるこの12月となりますように主イエスキリストの力ある御名によって祝福し、祈ります。

<待降節(アドベント)>

12月になると地上のすべての教会は聖誕までの四週間を待降節(アドベント)と言われ、敬虔に過ごしています。待降節というのは我々に来られる救い主イエスの誕生を待ち望む時期です。もちろんイエス様は2千年前に来られました。その初めの御誕、聖誕を言います。この人類の歴史の中に実際イエス・キリストが人間の姿を持って‘来られた’のは待降節の初めの意味であり、とっても大切な意味を含んでいます。一度実際‘来られた’神の御子イエスキリストご自身はまた再び来られると約束されました。一度この世に来られたイエス様を信じ、毎年アドベントを過ごしている者たちはまたその主が約束通りに必ず再び来られる主の再臨をさらに信じ待ち望む事になり、キリストへの信仰と期待感を増し加える時になります。

そして神様の子として人間の姿を持って来られたイエス様は人類を罪を赦し、救うためにご自分を十字架に明け渡しました。この感激が二つ目の待降節の意味をもたらします。

二つ目は、待降節(アドベント)は‘その主が来られる’という意味を持っています。‘来られる’のは現在に含まれていて、当時だけではなく、今日でもいつでもイエス様を信じ受け入れる者にはその人の心にイエスキリストが来られるからです。イエス様の初臨というのは歴史の中で起こった事実としてすべての人のための客観的なものであるなら、この二つ目の意味である来られるのはとっても個人的であって霊的なものです。人類のための神様の救いが、私にまで訪れたという事実を信じる瞬間、我々はその主の愛と救いを受け入れ、感謝せざるをえないと思います。

三つ目の待降節の意味は‘将来に来られる’という意味が含まれています。待降節(Advent)は‘来る’、‘到着’を意味するラテン語‘adventus’から由来された言葉です。これは最初はキリストの初臨を意味し、聖誕の時だけ使われていました。それが今日は主の誕生を前もって準備するクリスマスの前の四週間を意味となり、それだけではなく、待降節のほかの名称(めいしょう)として待臨節(たいりんせつ)、降臨節(こうりんせつ)などともあります。つまり、一度すでにこの地に来られたイエス様はその日とその時はだれも知らないですが、ふたたびかならず来られると約束された(マタイ24:36)通り信じ、待ち望む時である意味にもなります。以前使徒の働き講解中にも話しましたが、たしかな事実はある日來られるイエス様は力のない赤ん坊の姿ではなく、世をさばかれる王の王として必ず来られることです。(黙示録22:20)その再び来られるイエス様をだれが待ち望むことができますか。2千年前に来られたイエスキリストを心に受け入れ信じている聖徒だけが待ち望むことができます。待降節(アドベント)の時は三つ目の意味覚え、やがて来られるイエス様に対する望み、希望、信仰が私とみなさんに満ち溢れる時でもあります。むかし、ベツレヘムでお生まれになったイエス様を現在我々はもう一度心に救い主として受け入れ、かたく信じ、やがて来られるイエス様を待ち望む信仰の姿勢を持って過ごすべき時期でもあります。イエスキリストはこの地にすべての人々に罪から離れ開放させるため悔い改めと赦しの恩寵を与えるために来られました。信じる人々に神の救いと真の平安の機会を与えるために主イエスキリストは来られたのです。今年のアドベントがみなさんにこのような主の豊かな恵みの季節となりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン。

<今日の本文>

今日は使徒の働き9回目でありながら、今日からは今年年末まで待降節とクリスマスの主人功であられるイエスキリストについてのメッセージを続けたいと思いますので、共に年末謙遜に我らの主イエスキリストをどんな時よりも深く黙想する恵みの時となりますように切に祈ります。

ある方が訪ねてきて自分の精神状態をこのように言いました。“私は自分が何をしたいのか、何がほしいのかよく分かりま

せん。いや、自分がだれなのかすら分かりません。これからどうやって生きるべきなのかも分かりません。私は一人でいるのも耐えられません。ですから、たえず、愛情を求めてさまようのです。そして、その対象に見捨てられないかいつも恐れます。対人関係においては波のように揺り動く時が多く、どこに飛んでいくか分からないボールのように予測しがたいです。時には、泡（あわ）のようにお金を無駄に使ってしまっは、後に後悔します。そういうわけで、お金も貯める事ができません。情緒（じょうしょ）の面においてはいつも不安を感じます。このような不安がひどくなると、自殺の衝動（しょうどう）をも時々感じています。ですから、いつもだれかに頼らなければいけない依存的人生を生きているような私です。”みなさん！精神医学でこのような症状の病名を‘境界線性格障害(borderline personality disorder)’と言います。人々の中で約 2-3%がこのような症状がひどく表れてカウンセラーや、医者に訪ねますが、実際、このような症候群を軽く感じながら生きている人々が少なくないということです。病名がとつても興味深くないでしょうか？‘境界線性格障害’は本来の意味は神経症と精神病の境界線に位置するという意味から由来があるそうです。

しかし、しばらく考えてみれば、実はだれでもどうしようもできない状況におかれ、自分をよく分かるようで、わけ分からない、隣人に近づくこともできず、遠ざけることすらできないいわゆる境界線上の不安を感じていませんか。教会に通いながらまともに信仰生活をすることもなく、かといって教会の必要性を否定することでもない境界線上の信徒たちも少なくないと思います。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！今日の聖書に出ている人物を見て見ましょう。病気の彼が実は上の人のようなかわいそうな者ではありませんか。足のきかない者であって、無力な人でした。使徒の働き、**使徒の働き 4章 2 2 節**によると、彼はおよそ生まれから 40年間ずっと足のきかないまま生きていました。彼は絶望というのは何かを十分体験し、飢え乾いたこじきで今日の教会のような聖殿の門の前に毎日すわっていて入る人々から施しを求めてしました。

実は彼はだれよりも聖殿の一番近くに住んでいたのにもかかわらず、聖殿の生活とはまったく関係のない生活でした。彼は一度も聖殿に入ったこともなく、そして聖殿に入る人たちのみならず、礼拝をうける神様とはまったく関係のない生活でした。彼は町の人々のみならず、神様とも断絶された人生を送っていた孤独な人でした。彼はきっと“教会って生活に余裕がある人が行くところで、ぜいたくだぞ。だから私のような者は神様には近づけないでしょう。”と思ったかも知れません。自分のように病気の人で、まずしくて汚い人は神様さえも忌み嫌われていてふさわしくないと思ったかも知れません。そんな彼がイエスキリストの御名を紹介された瞬間おどるべき出来事が起こります。どんなことですか。40年間ほどずっとすわったまま生活した彼が、まっすぐに立ち、踊り上がって、歩き出したのです。つまり癒されたのです。根本的な問題が解決されたわけです。そして、新しい力を得たのです。彼にもこれから自分の力で生きる希望が与えられました。それだけではなく、癒された後、彼はうまれて初めに聖殿に入りました。聖殿に入って行って神様を賛美しました。いままで神様とは関係がなかった彼が神様を賛美しそして神様を礼拝する人々とともに交わることができたのです。彼はもう孤独な人ではありませんでした。どうしてこんなことが可能だったのでしょうか。キリストの弟子の二人、つまりペテロとヨハネがイエスキリストの御名を紹介したからであります。

愛する信仰の家族のみなさん！クリスチャンとしての私たちの特権の一つは何ですか。私を救ってくださったイエスキリスト！私の人生を新しく造り返ってくださったイエスキリスト！私の人生において希望と力になるキリストを紹介することであり、主イエスキリストと出会える事はないでしょうか。今日私たちもどうすればペテロとヨハネのように主イエスキリストの力ある御名によって力ある信仰の生活をする事ができるでしょうか。三つのポイントでみなさんとともに考えて見たいと思います。

第一番目にまず私たちもイエスキリストの御名によって祈る事をいつも身につけなければなりません。

今日聖書の本文ではペテロとヨハネという主の弟子を通して表れたその驚きの力の源は彼らがいつも主の前にささげた祈りにある事が分かります。本文の 1 節ではこのように書かれています。“ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。”ここで‘祈り’という言葉が使徒の働きの中で 4 回目に出ている事がわかります。（“みな心を合わせ、祈りに専念していた”（1:14）、“彼らはこう祈った。”（1:24）、“彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。”（2:42））など使徒の働き全体では‘祈り’という言葉が 32 回も続けて登場しています。なぜでしょ

うか。御言葉を通して働いておられる聖霊の神様は祈りの霊だからです。なので、初代の教会の人たちは懇切に祈りました。熱く祈りました。初代教会の神の家族は御言葉といつも集まっている時、共に祈る教会であり、散らされても、各自祈る事を忘れていなかったクリスチャンたちでした。

彼らは宮に何をしに行ったのですか。そうです。祈るためです。当時敬虔なユダヤ人たちは一日三回時間を決めて祈りの時間を持ちました。イスラエルの時間に6時間を足せばこんにち私たちが使っている時間と同じになります。ですから3時だと朝9時、6時だと正午12時、9時は午後3時になるのです。

ところが、ペテロとヨハネが祈りの時間に宮にのぼって行った時間は何時でしたか。イスラエルの時間では9時つまり、今日の午後3時でした。ユダヤ人たちが一日中一番祈りたがらない時間帯は午後の3時でした。なぜならば、午後3時といえば、昼食後、まだ暑い時だから何もせずひたすら眠くなる時間だからです。しかしペテロとヨハネはその時間に祈るために宮に上って行ったと書かれています。ここで何を知る事ができますか。彼らにはすでに祈りの習慣が見に着いていたということです。私は私たちが一生生活しながら身につくべき習慣の中一番きよい習慣があれば、それは祈りの習慣だと思います。この祈りの習慣がしみこまれていたため祈りをささげに行く彼らに予想もしなかったすばらしい力も体験し、大胆にイエスキリストの御名を伝える力さえも得られたのです。

愛する神の家族のみなさん、ここで祈りについて大事な一つを学ぶことができますでしょう。それは祈りは何か問題がある時、困っている時だけ神様に求めることではないと言う事です。そのようになると、却って祈る事がない時が平安な時だと思い、祈らないのはまるで祝福を受けているかのように考え込んでしまいます。しかし、それは大間違いです。

祈りの定義はみなさんも御存知のように神様との会話をする事であり、交わる事です。神様の御心を探ることでありますので、祈ってないと言う事は神様との関係がうまく行ってない証拠であり、主の御心より自分の思い通りに、自分の力で生きている状態ではないでしょうか。まるで親と会話がない子供たちという親子の関係が形は持って中身は幸せじゃないと言う事と同じです。特に、祈らなければ主の答えを頂くこともできないので、イエスキリストの御名にある力を実際自分が経験する事もできないのではないのでしょうか。常に祈らなければ、神の力が注がれていても神の答えだとすら、気づかないうちに流してしまう事をよくあるでしょう。なので、祈りは信じている者たちだけが真の生きておられる全能の父なる神様にできる特権であり、祝福である事を忘れないようにしましょう。

ですから、今日本文の主の弟子たちのように、いつも祈る大切さについてはいくら強調しても足りないと思います。祈りの習慣はとつても大切です。祈る親の子供たちは決して滅ばされないとよく言われます。まず親である私たちが祈りの習慣を身につけ、子供たちにも祈りの習慣を教えるようにしましょう。今年が終わる前にほんとうにイエスキリストを紹介してあげたい大切な人がいますか。いるのならその前、私たちはその人のためにまず祈りをもって備えていた時、イエスキリストの力が伴われると信じます。そして、年末、全家族が何よりも共に集まって感謝の祈りをささげる事はいかがでしょうか。

第二番目に私たちが人々にイエスキリストの力ある御名がいかに必要であるかを見通さなければなりません。

クリスチャンたちはこの世がいかにイエスキリストを必要としているのかを眼目(がんもく)を持たなければなりません。宮に祈るために行くペテロとヨハネは途中で足のきかないこのこじきに出会います。彼らにとっては祈りの時間を守ることも大切でしたが、彼らがこの人に目をそばめませんでした。むしろ彼のところにとどまって彼を見つめました。

4節を見ましょう。“ペテロはヨハネとともにこの男をみつめて「私たちを見なさい」と言った。”その時この人は何を期待したでしょうか。ペテロとヨハネの見かけがみすぼらしく、あまりお金もないみたいなので、コインでもいくらかはくれるだろうと思ったかも知れません。しかし、みなさん、ペテロとヨハネが彼にあげたのは物質ではなかったことに注目してください。

かりに私たちがこのような場合にあわれたとすれば、もちろん物質的助ける事も最善をつくすべきだと思います。しかしペテロとヨハネはお金だけで、彼の根本的な必要が満たされるとは思いませんでした。一時期だけの助けにはなるお金以上の何かがか彼に必要であることを深く見つめていたのです。

どなたか6節を読んでくださいませんか。ペテロとヨハネは目の前の人を見ながら同じ考えをします。

‘私がこの人のためにやってあげれることはなにか。私にある一番大切なもの！この人にとって一番必要なもの。不安定

で、何の希望も見えないまま生きているこの人に一番力となれるもの。’ 彼らは同じく自分たちが経験した “イエスキリストの御名” という答えを考えました。しかし、一日一日施しをもらって生活しているこの人が期待していたのはただの一食にでも買える金だったかも知れません。足のなえたこの人は自分自身さえも自分にキリストが必要である事実を知りませんでした。しかし弟子たちはわかっていました。キリストの御名によって恵まれ、救われる事こそ、いかにおどるべきの祝福であるのかを私たちは知っています。キリストによって得られる愛と人生の変化と希望が何であるのかを私たちもよく知っています。ペテロとヨハネは彼にイエスキリストの御名をプレゼントしました。そしてイエスキリストの御名は彼に奇跡を起こされました。イエスキリストの御名こそが根本的な問題を解してくださったのです。ですから、私たちは福音を伝えるにつれて前もって知っておくべきのことは人々にキリストがいかに必要であるかを知ることです。わたしとみなさんの中にこの確信が改めて強められますように心から願います。

第三番目に 私たちも弟子たちのようにキリストの御名によってともに一つとなり協力しなければなりません。

ペテロとヨハネは一緒に宮に上って行って、二人でペアになってイエスキリストの御名を与えました。そして、たちまち美しい門という宮の門の前で生まれてから足のきかなかったその人のあしとくるぶしが強くなり、踊り上がってまっすぐに立ち、歩き出したのです。奇跡が起こり、一生病気に縛（しば）られていた彼がその病気から解放され、救い出されました。そして、聖殿に入り、彼の口から神を賛美する事ができ、彼の人生が変えられるこの神の驚きの奇跡が起こされるために用いられた人たちがペテロとヨハネでした！この二人の協力し、主の御名を伝えた結果でありました。

聖書の中、ペテロとヨハネは同じ町で一緒に育てられましたがつっても対照的（たいしょうてき）な性格の人たちでした。以前ペテロはとっても短気で、積極的な人でした。いつも弟子たちの中でもリーダーになりたがった弟子でした。ですからペテロは十分考えずに先に言葉や行動に移してしまった結果過ちもたくさんありました。反面、ヨハネはとっても受身的な人でした。静かで、いつも落ち着いていました。ところが、この二人はライバル関係でもありました。どう見ても合わない二人でした。ヨハネ2章を見ると親しい関係でありながら、同時に競争意識も強かった二人でした。

そんな二人が今は使徒の働きでは二人が一つとなって伝道をしています。二人がともに迫害を受け、苦しみも一緒に受けます。祈りの同労者、伝道の同労者となったのです。今日の聖書の時もきっとペテロは先にこの惨めな人を見て積極的にイエスの御名を伝えたには違いないと思います。そしてヨハネはきっとペテロのそばで、しずかにその魂のために祈ったかも知れません。‘神様！今ペテロの唇を用いて下さい。イエスキリストの尊い御名に力を下さってそれを聞いているあの人の人生に臨在し、御手を差し伸べて、彼を癒し、回復し、変えられるように助けてください。’

いかにすばらしい同労の姿でしょうか。私たちお互いの関係もただの交わり関係ではなくこのように祈りの友として、伝道の友として主の働きをともにする同労者の姿にさらに変えられていかなければと思います。私たちの教会にもこの信仰の同労の関係が生かされる事を切に祈ります。我々の教会もイエスキリストの御名を紹介するために教会の家族が共に祈り、イエスキリストの御名を伝えるために共に働き、イエスキリストの御名によって共に前進しましょう。

愛する主の教会の家族のみなさん！最後にこの話をして終わりたいと思います。以前みなさんに紹介した事がありますが、カトリック教会が盛んだ時、中世ローマカトリックは全ヨーロッパを支配した時がありました。当時教皇の権力は国の王よりも絶対てきでした。その時、ある教皇が有名な信学者トマスアクィナスという人を皇室に招きました。彼は勇壮（ゆうそう）な宮殿を見せながらトマスに話します。“初代教会は金銀は私にはないが”と言ったのだが、“ほらトマス、この世は変わったぞ、われらにはこんなに金銀を手に入れるようになったのでどれほどの神の祝福なのか。”、これを聞いたトマスはこのような有名なこたえをしたそうです。“教皇様！しかしながら今日の教会は金銀はわたしたちにはないがということばのみならずナザレイエスキリストの御名によって歩きなさいというたいんな信仰の宣言さえ言えなくなったのではないのでしょうか” 真のイエスキリストの御名だけにたより、御名による信仰が黄金によって真の教会の力さえ失ってしまったと言ったトマス先生の警告を今日の教会たちも、私たちもいつも念頭に置くべきだと信じます。

今アドベントの時期に、私たちクリスチャンプレイズチャーチ全家族がもう一度力ある主イエスキリストの御名に頼りて共に祈り、救い主主イエスキリストの御名によって共に一つとなって、共に主の御名を証しをし、紹介し、述べ伝えることによってすばらしい主の恵みと愛の奇跡を体験する恵みの季節となりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！



【アドベントの祈り】

春を待ち望む冬のように、

貧しい心をもって再び来られる主を待ち望みます。

飼葉おけのように、自分を低くし、汚れた心を空にしてきよめ

再び来られる主を待ち望みます。

主だけにささげる贈り物を用意し

再び来られる主を待ち望みます。

自分の利益だけを追い求めていた目を閉じ

再び来られる主を待ち望みます。

握りしめていた欲張りの手を開いて分け与え、共に手を取り合って

再び来られる主を待ち望みます。

高ぶりを砕いてへりくだり、再び来られる主を待ち望みます。

思い煩いを捨て騒がしいしゃべりを捨てて、悔い改めと涙をもって

再び来られる主を待ち望みます。

失われた信仰の始めの愛を取り戻すために

再び来られる主を待ち望みます。

ひそかに捨てた私の十字架を再び負い再び来られる主を待ち望みます。

2000年前にこの地に来られた主よ！

マラナタ！再び早く来て下さい。

この降誕の季節に、あなた主イエスキリストを

深く黙想し、切に待ち望みます。

イエス・キリストの御名によってお祈り致します。アーメン！